

べる。そして最後に、きわめて楽観的なタイの将来を簡単に言及する。

本書は、彼女の10年前の経験であるだけに、もうかなり時代おくれな叙述が、ところどころ見られる。たとえば、「バンコクでは小型ヨーロッパ製のタクシーがはんらんする」とあるが、今日、タクシーのほとんどは日本製だ。これは著者の責任というよりも、それほどタイは急激に変化発展しているということである。この変化発展について、著者があまり強調していないのは、タイの概説書として大きな欠点だと思われる。

しかし、とくに歴史に重点をおいたタイの入門書として本書は特色をもっている。加えて文章がきれいだし、写真も印刷もみごとで、読んでいてなかなかたのしい。タイへはじめてこられる研究者に、その専門のいかに問わず、目をとおしていただきたい本である。

(本岡 武)

Khana Ratthamontri: *Pramuan Sunthraphot khong Chomphon Sarit Thanarat 2 Vols.* Rongphim Samnak Nayokratthamontri, Bangkok, B. E. 2507 (1964). 1318 p.

1963年12月8日、プラモンクットクラオ陸軍病院において不帰の客となったタイ国前首相サリット・タナラット元帥の遺体は、翌64年3月17日、バンコクのテープシリ寺院附属斎場において荼毘にふされた。本書はその火葬に際し国王より初火を賜った記念に参会者に配布された「領布本」の一部をなす「サリット元帥演説集」である。編集は内閣の手になり、第1巻には仏歴2502～2504年(1959～1961)、第2巻には仏歴2405～2406年(1962～1963)がそれぞれあてられている。表題には「演説集(Pramuan Sunthraphot)」とあるが、収録された内容は下表のとおり多岐にわたるもので、さながら「サリット首相公式発言集」の観を呈している。

(1) 挨拶 (Kham Prasai)	104篇
(2) 式辞 (Kham Klao)	93
(3) 議会演説, 声明文など (Kham Thalaeng)	17
(4) 演説 (Sunthraphot)	5
(5) メッセージ (San)	70
(6) 訓話 (Owat)	47

(7) 上奏文 (Kham Krapthawaibang-khomthun)	12
(8) 祝詞 (Kham Khwan)	80
(9) その他	10
合 計	438

各篇の配列は内容とは無関係に年代順に行なわれているが、各巻冒頭には内容と日付を明示した目次がふされており検索に便利である。全篇中「挨拶」に分類されるものが量質ともに重要であるが、これには新年の挨拶、クーデタ記念日挨拶という国民を対象とした施政方針演説のようなものから、視察に赴いた東北タイの一寒村で、村民をまえに行なった挨拶まで含まれる。議会演説の大半は予算演説であるが、声明文はサリット政権が直面したいくつかの重要事件に対する政府の公式見解であって高度に政治的内容をもつ。「生活費値上り」、「仏教教団誹謗ビラ事件」、「ラオス・クーデタ」、「東北タイ分離運動首謀者処刑」、「ラスク・タナット声明」などがその内容をなす。

ピブン、プリディら人民党出身の理想主義的政治家たちが目指してきた民主主義への歩みを、西欧文明への盲目的追従として退け、デモクラシーへのリップサービスを一切拒否し、時代錯誤との非難をも甘受してひたすら独裁体制の確立につとめ、強権を背景に多数の野心的政策を推進してきたサリット政権の評価はかれの死後3年を経た今日、なおも定まってははいない。しかしその功罪はともあれ、30年の歴史の流れを真向から否定し、個人専制の色彩の極めて濃厚な特異の政治体制を作り上げたという点において、サリット政権の5年間はタイ国憲政史上画期的意義をもつものと思われる。この意味においてサリット政権研究の根本資料ともいえるべきかれの公式発言集が権威ある機関によって編纂上梓されたことはまことに喜ばしい。本書におさめられた演説はいずれも腹心の ghost writers が起案し、サリットがこれに朱を加えたものと想像されるが、注意深い読者は、独特な論理の展開と頻出する愛用語の中に、強烈なかれの人格の流露を得るに違いない。同時に配布された姉妹篇 *prawat lae phonngan khong Chomphon Sarit Thanarat* (サリット元帥の略歴とその業績) とともに一読をおすすめしたい。

(石井米雄)